【主題】道徳教育における家庭との連携を図る一試み

【副題】学級通信の活用を通して

【学校・団体名】　名取市立増田小学校
【役職名・氏名】　教諭・藤沼　恵美

1　はじめに

特別の教科「道徳」として、道徳教育が進められるようになってから８年。教科化されたことにより、授業の進め方をはじめ、構造的な板書の仕方、評価に生かせるノートやワークシートの活用、ICT を活用した授業づくりなど、様々な面から研究が行われている。

私は、昨年度より道徳教育推進教師に任命され、今年度２年目になる。道徳の授業の充実はもとより、校内の道徳教育推進、家庭や地域との連携についても考える機会が増えた。道徳教育の情報提供、研修に関する情報、教材の活用等について、教員向けに【道徳通信】を発行してく中で、家庭との連携の方法としても通信が活用できるのではないかと考えた。

本論文は、昨年度１年間の実践をまとめたものである。

2　主題設定の理由

（1）道徳教育推進教師の立場から

道徳教育推進教師の役割として、小学校学習指導要領解説（道徳編）にいくつか例が挙げられている。道徳教育の指導計画作成といった事務的なこと、教材の整備や充実、活用といった授業に関すること。そして主題設定の根拠となる、授業の公開など家庭や地域社会との連携に関することである。

本校では、年に数回授業参観が設けられている。昨年度はその内の１回（１時間分）を道徳にし、保護者へ授業の公開を行なった。しかし、授業の公開は果たして家庭との連携になっているのか、疑問に思った。授業を見てもらうことが家庭との連携と言えるのか、もっと保護者等に働きかけていく必要があるのではないかという思いに至った。

（2）本県における教科の重点から

宮城県教育委員会が発行した「学校教育の方針と重点」において、特別の教科「道徳」について

・指導の効果を高めるための指導計画の工夫
・道徳科の特質を生かした学習指導の工夫
・成長を認め、励ます評価の工夫

以上３点を挙げている。道徳科の特質を生かした学習指導の工夫の中で、「道徳科の授業の公開や地域教材の活用等、家庭や地域の人々、各分野の専門家等積極的な参加や協力を得るなど、家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図る。」と記されている。家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図るためには、授業を参観してもらうだけでは不十分ではないかと考えた。

（3）児童の実態から

私は、年度当初から学級通信を発行している。学級通信を配付すると、その場で読み始める児童がほとんどであった。また保護者から感想が寄せられ、通信に目を通してもらえていることが分かった。これらのことが、学級通信の活用に視点を向けるきっかけとなった。

以上、（1）、（2）及び（3）の理由から、本研究主題を設定した。

3　研究仮説

学級通信で道徳の授業のことを取り上げれば、保護者に授業の内容が伝わるであろう。保護者に授業の内容が伝われば、家庭で話題にする機会ができるであろう。そして、学校と家庭との共通理解が深まれば、学校での指導の効果が高まるであろう。

4　研究の実際

（1）学級通信の活用

年度当初から学級通信を発行していた。通信の内容は、学級の様子はもちろん、日々の指導の内容、指導の意図、担任の思い、保護者へのお願い等を載せていた。

また、Google form を活用し、紙面上に QR コードを載せ、日々の通信の感想を募った。寄せられた感想には紙面上で返答し、保護者と双方向のやり取りができるようにした。

（2）学級通信～道徳編～の活用

①道徳編その１

道徳編として最初に発行したのは、道徳の内容について説明したものである。道徳の内容が、「主として自分自身に関すること」「主として人との関わりに関すること」「主として集団や社会との関わりに関すること」「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の４つに分けられていることを説明した。

さらに、道徳の授業の導入として、子供たちに４つの中で自分が大事だと思うものはどれか考えさせ、それを通信で紹介したところ、子供たちにどれを選んだのか尋ねたという保護者の感想が２通寄せられた。１人は「主として自分自身に関すること」を選んだ児童。自分の考えを大切にして良いところを見つけていきたいと母親に話したとのことだ。もう１人の児童は、「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」を選び、その理由としてどれも大切なのは分かっているが、今の自分に欠けているものを選んだと話したとのことだった。他にも家に帰ってから、自分が選んだのはどれか、親に聞かれたという児童が数名いた。

②道徳編その２

授業の内容を紹介した１枚目は、授業の大まかな内容を載せ、児童の振り返りの紹介を目的としていた（図１）。授業の中で、児童のやり取りがとても活発だったこと、「へんしん」をどれにするか、家庭でも話題にしやすい内容と考え、通信にした。通信発行の翌日、児童に家庭でのを尋ねたところ、複数の家庭で話題にしていた。道徳の話から、「へんしん」という漢字が他にもあることに話題が膨らんだ家庭もあったとのことだった。

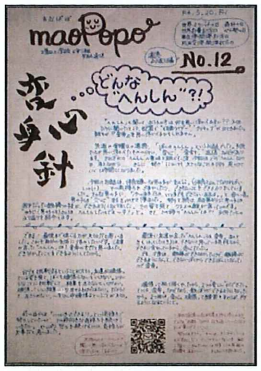

図１

③道徳その３

授業の内容とともに、児童に行なった事前アンケートの結果を載せた（図２）。アンケートの結果は、授業時に提示している。配付後保護者から、家庭で話題にし、我が子がどの回答にしたか尋ねたという声とともに、他の児童がどのような考えを持っているのか分かって良かったとの声があった。

図２

④道徳編その４

学級通信に道徳の板書を載せたのは、この時は初めてだった（図３）。授業後に子供たちが板書を「傑作」と発言したのがきっかけだった。この通信以降、道徳編には必ず板書を載せるようにした。配付直後に児童に児童が見入るようになった。

図３

⑤道徳編その５

昨年度最後の参観日、道徳の授業を行なった。その時の内容を通信にした（図４）。保護者が参観しているため、道徳編は、児童の振り返りを紹介する目的で作成した。

図４

５　研究の成果

（1）成果①　～保護者の声～

昨年度末、保護者へアンケートを実施した。内容は以下の通りである。

学級通信道徳編について

・道徳編を読んでいたか（４択）

・読み終えた後、内容について子供と話したか（２択）

・通信についての感想（自由記述）

「話すと答えた保護者に対して

・どのような内容について話したか

（４択その他あり・複数回答可）

回答方法は、Google Form（QR コードから）と回答用紙での２通りを用意し、期間は１週間とした。児童 32 人の内 24 人の保護者から回答があった。

１つ目の質問について、道徳編を読んでいなかったという回答はなく、24 人すべてが通信を読んでいる上で２つ目以降回答していた。

道徳編を読んだ後、家庭で話題にすると答えた人は 18 人である。話題にした内容としては、「我が子がどんなふうに考えているかを聞いた」という回答が 14

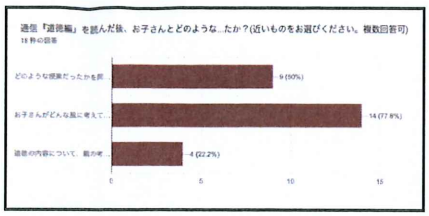

図５

人と最も多く、「どのような授業だったかを聞いた」が９人だった（図５）。

通信道徳編の感想では、授業の分かりやすさについて「授業の内容が分かりやすくまとめてあって読みやすかったです。子供自身のおさらいにもなりました。」「板書の写真があるのが分かりやすくて良いと思います。子供たちの考え方が変わっていく様子などよく分かります。」というものや、「板書の写真を見たり、子供たちの意見の内容をプリントで見ながらお話ししたりしています。息子の考えを聞きつつ、父親も横から意見を言ったり、家族で議論してみたりしています。」「クラスのみんなの意見を見て、こちらも考えるきっかけをもらっています。」「道徳は正しい答えがないので、大人も考えさせられるなと感じました。」「子供に自分だったらどうするかを聞いて、親の考えも伝え話し合いました。良い経験ができました。」等、通信道徳編をきっかけに家族で道徳の話がなされていることがわかるものだった。

授業の内容が保護者に伝わることは、児童にとっても保護者にとってもプラスなのだと感じる。伝える方法として板書を通信に載せることは、文字だけで伝えるよりも分かりやすいことも感想から伺えた。通信道徳編には、児童の振り返りも載せたが、我が子の考えだけでなく、他の児童の考え方に触れることで、家庭でも深まりがあるのだろうと考える。

親子で道徳の話をするというこの経験は、保護者にとっても良いものであると感じてもらえていることが分かった。

（２）成果②　～児童の声～

昨年度末、保護者へのアンケートと同時期に児童へもアンケートを実施した。回答方法は、iPad を使った Google Form への入力である。

道徳について

・道徳は好きか、嫌いか（４段階選択）

・通信道徳編を読むか（３択）

・家の人と道徳の話をしたことがあるか（３択）

「話したことがある」と答えた児童に対して

①どのような話をしたか（４択、複数選択可）

②家の人と道徳の話をするのは好きか（４段階選択）

③②の答えの理由（自由記述）

「話したことがない」と答えた児童に対して

・家の人と道徳の話をしてみたいか（２択）

以上のことを質問した。32 人在籍中、30 人が回答した。道徳について、好きか嫌いかを問う質問では、図６のような結果になった。好きと嫌いの間を４段階とし、

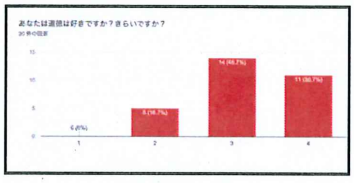

図６

３と４が好きに近く、１と２が嫌いに近いと考える。学級全体としては道徳を好意的に捉える児童が多いことが分かる。

通信道徳編を読まないと答えたのは、30 人中５人であった。実はこの５人は、１つ目の質問で道徳を「どちらかというと嫌い」と回答した児童とは必ずしも一致していない。このことから、道徳が好きか嫌いかに関わらず、通信に目を通していることが分かった。

次は、家の人と道徳の話をしたことがあるかについてである（図７）。この質問は、３つの回答を用意した。「話したことがない。」「通信道徳編が出ると話をする」「通信に関係なく、道徳の話をする」である。１番大きい部分が「話したことがない」を選んだ児童である。ただ、この質問で分かったのは、それだけではない。

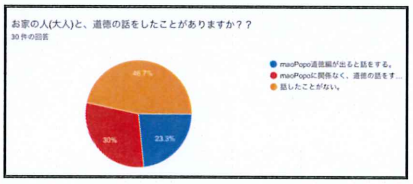

図７

注目すべきは２番目に大きい部分で「通信に関係なく道徳の話をする」と答えた児童が９名いたことであろう。

この点に関して、児童の方から話すのか、保護者の方から話すのかは定かではない。児童の方から話をしていたとしたら、担任として嬉しい限りである。

家の人と話をする内容については、どのような授業だったかを聞かれたという回答が大多数を占めた。他の選択肢として、「授業の内容についてどんな風に考えいるかを聞かれた」「道徳の内容について、家の人の考えを聞いた」「道徳の授業と同じような大事な話をしてくれた」を設定したが、それぞれ３名ずつ回答があった。

家の人と話をすることに対して、児童はどのように考えているのかを質問した。嫌いと回答した児童はおらず、16 名中「どちらかといえば嫌い」と答えた児童は２名だった。

親との会話について「好き」「どちらかと言えば好き」（以下好き）、「どちらかと言えば嫌い」を選んだ理由を尋ねた。好きと答えた児童は、「お母さんも道徳が好きなので、話をしていてすごく楽しい。」「話をすると、お母さんの意見も聞けるから。」「元々道徳の授業が好きだし、親の考えを聞けるし、自分の考えをしっかり言えるから。」「お母さんも道徳の意見を言ってくれるので、（だよね。）とか（お母さんはこうなんだ。）と思えるから。」等、親の意見や考えを聞けることに楽しみや面白みを感じていることが伺える。一方、嫌いと答えた児童は、「つまらないから。」「普通だから。」という理由だった。話をするのが普通のことなのか、話す内容が普通のことなのか、児童に聞いてみるべきだったと後悔が残る。

最後に「親と道徳の話をしたことがない」と答えた児童14名に、家の人と道徳の話をしてみたいかを尋ねた。14名中9名が「話をしてみたい」と回答した。この9名の中には、道徳が嫌い（4段階の2）を選択した児童も含まれている。また、通信道徳編を読むと回答した児童が7名いた。通信道徳編が保護者だけでなく、児童にも効果的だったと言えるのではないか。

（3）成果③　～担任としての実感～

道徳の授業で「感謝」について学習した後、児童が身の回りでお世話になっている方に、自主的に感謝の言葉を伝えたということがあった。この事実を通信道徳編に載せたところ、児童の中でこの行いが広がった。

通信道徳編を発行するのは、道徳を行なった当日ではなく、数日経った後、もしくはそれ以上時間を経てからのことが多かった。

数日経った頃に、授業で学習したことにもう一度触れること。これは、授業時間の中では難しい。しかし、通信に書くことで、授業時間を取らずともそれが可能だと感じた。通信を配付したとき、一瞬静寂が生まれ、全員が紙面を見つめている。通信は、保護者向けだけではなく、児童向けでもあったのだと気付かされた。

6　今後の課題

（1）通信の発行について

私は、通信を書くことが苦にならない、むしろ好きである。通信を作成する時間が、特に負担ではない。ただ、通信作成には、ある程度の時間を要するため、その内容をさらに精査することが大切である。

【学級通信】という形ではなく、道徳通信として考えれば、一年間発行したとしても35号である。私が昨年度発行した道徳編の通信は、35号に至らない。数号である。35時間の授業の中で、いくつか的をしぼり、年に数回発行することが現実的と言えよう。この時、学校の重点課題に沿ったものであれば、なお良いと考える。

（2）地域や保護者からの発信について

改めて連携の意味を調べると「互いに連絡し合いながら、一緒に物事をすること」と記されている。道徳教育に当てはめるとするなら、「学校と地域や家庭が、互いに連絡し合いながら、一緒に教育をすること」になろう。学校から発信することと同時に、家庭や地域の声を受信することが大切なのだ。

「道徳科の授業を公開する」、これは「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」（以下学習指導要領解説）にも提示されている。公開するのは、学校における道徳教育への理解と協力を得るためだ。一度の公開では不十分な部分を、通信等で補うことになるのだろう。

では、地域や保護者からの発信は、どのようなものが望ましいのだろうか。学習指導要領解説には、授業の公開だけでなく、地域や家庭の道徳科の授業への積極的な参加や協力を得る工夫についても書かれている。「授業の実施への地域の人々や団体等外部人材の協力を得る」、「地域教材の開発や活用への協力を得る」の2つだ。

私は、所属校に勤務して7年目になる。しかし、地域への理解は年月に比例していない。地域教材の開発や地域の適切な人材と言われても、お手上げだ。学校がどのように道徳教育を進めているか、進めていく中でどのようなものを求めているのか、それらを発信することで、その発信に答えるような「地域や家庭からの発信」が必要なのではないだろうか。地域や家庭からの発信を求めるためには、学校からの積極的な発信が必要なのだ。

今後、学校全体で地域や家庭と連携できるよう、学校は何を発信し、地域や家庭はどのような発信を求めているのか、研究を深めていきたい。

＜参考文献＞

小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編
「例解　小学国語辞典　第6版」田近洵一編　三省堂